

防災歳時記 (54)

—「七五三」に台風が上陸した—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮 澤 清 治

晩秋・初冬にも台風が上陸する

立冬(11月7日)を過ぎ、暦の上で冬になったというのに季節はずれの台風が日本本土に上陸することがある。

最近では、1990(平成2)年11月30日に和歌山県白浜町に上陸した台風28号がある。上陸後まもなく温帯低気圧に変わったが、被害は28都道府県に広がり死者・行方不明者4人、家屋の全半壊162棟などを出した。台風統計のある1951年以降では最も遅い上陸台風だ。

記録に残っている最も遅い台風では、1894(明治27)年12月10日に房総半島に上陸した台風がある。長野県や東北地方で暴風雨となり、11日の最大風速が福島市で174m/s、日雨量は山形市で111mm、青森市で52mmという12月としては歴代1位の風や雨を記録した。山形市では堤防が決壊して一面の湖水となり、富山県では高波が打ち寄せ家屋が流された。明治のころは、台風という呼び名はなく「暴風雨」「大風」「猛烈な低気圧」などと言っていたが、明治の末になって「台風」と名付けられた。

晩秋台風として気象災害史に名をとどめ



写真1 和歌山県白浜町

るのは、1932(昭和7)年11月の俗稱「七五三台風」だ。

「七五三台風」が猛威を振るう

「七五三」は11月15日、3歳の男児・5歳の男児・7歳の女児が美しく着飾り、氏神に参詣して、成長を祝う行事だ。この日に、記録的な大台風が来た。

1932(昭和7)年11月14~15日、関東地方や福島県沖に襲来した台風は、猛烈な風・大量の雨・低い気圧をもたらし、まれに見る強いものだった。関東では、明治43年8月(明治最大の洪水)、大正6年10月1日(東

京湾大高潮)に次ぐ激甚な被害だった。

台風は11月13日、沖縄本島の南東海上を時速35~50kmで北東進し、14日朝室戸岬の南方約500kmを通過し、正午ごろ浜松市南方を経て、14日午後11時房総半島先端に達した。15日午前0時、千葉県勝浦市付近に上陸し、午前2時30分に銚子市付近を通過して福島県沖に向かった。

最低気圧は勝浦と銚子で952hPa(歴代1位の低さ)、最大風速(m/s)は銚子WNW31.5(11月として1位)、横浜NNW36.3(歴代2位)、静岡県三島NNE29.7(歴代2位)、東京N21.2、また14日の日雨量(mm)は東京169(11月として1位)、横浜135(11月として2位)、銚子106(11月として2位)などであった。

被害の特徴は次のとおりだった。

1. 烈風下、火災が相次いだ

静岡県富士郡元吉原村(現富士市)で、14日午後7時ごろ(台風が伊豆半島南方を通過中)烈風下で火災が発生した。猛烈な火勢で手の施しようもなく、同村の3集落250戸が全焼し、午後11時ころ鎮火した。

寒い暴風雨にさらされ暗夜をさまよう有様は見るからに気の毒であった。

このほか、茨城県太田町西木崎(現常陸太田市)で、14日午後9時すぎに出火、折柄の烈風にあおられ火の手は見る見る拡大し、目抜き場所150余戸を全焼など。

火を使う季節の台風襲来には、大火に注意したい。

2. 暴風で校舎や広告塔・煙突が倒れた

東京市内で7小学校の校舎が倒れ負傷者10人などを出し、荒川区・淀橋区などでは工場やふる屋の煙突が倒れた。神奈川県川



写真2 送電線への着雪(電力中央研究所)

崎市では15日午前1時ごろ、高さ約25mの広告塔が倒れ、死者2人、重傷者3人。

3. 家屋に浸水し、がけが崩れた

大雨のため、東京市内では浸水家屋が4万戸を超えた。横浜・横須賀市ではがけ崩れで30戸が埋没し、6人が死亡。

4. 漁船などが大量遭難した

台風の直撃を受けた福島県沖・鹿島灘ではサンマ漁船約40隻が行方不明となり、漁師250人が絶望、また伊豆半島西方沖では貨物船が沈没し36人が死亡した。

5. 山地では大雪が降った

標高の高い長野県南佐久郡南牧村などでは、雨が雪に変わり積雪10~15cm。強風・大雪・着雪のため家屋417戸が全半壊し、木が倒れ、送電線が切断した。

全国の被害は、死者・行方不明者257人、傷者345人、家屋の全半壊31,870戸、床上・床下浸水65,330戸、家屋の全半焼174戸、船の沈没34隻・流失1,100隻に達した。

(注)東京地方では、15日は台風一過の七五三日

和に恵まれた。神社には女の子は友禪染の和服が、男の子は陸海軍大将の洋服が多く見られ、非常時の世を反映していた。